紅桜舞う日に

GWINKO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅桜舞う日に

【Ｎコード】

Ｎ６９２５Ｌ

【作者名】

ＧＷＩＮＫＯ

【あらすじ】

春の日の銀時と十四郎のできごと。

（前書き）

この作品は「劇場版銀魂　新訳紅桜篇」公開記念として「銀土裏妄想劇場」に書いたものを改題して転載したものです。

「銀ちゃん、下で誰かさんが待ってるヨ。」

神楽が酢昆布の紙袋を抱えて帰るなり銀時に告げた。

銀時は読みかけのジャンプを閉じ、頭を掻き掻きのっそりと長椅子から起き上がった。

「わたし出掛けるから遠慮せずに上がってこいって言ったアルけど、呼んでくれって待ってるヨ。」

「ん〜。わぁった。」

銀時は気のない返事をし、仕方なさそうに立ち上がりつつもそそくさとブーツを履き玄関を飛び出した。

「よぉ…。」

慌てて飛び出してきたことを悟られないよう銀時が着物の裾の乱れを直しながら階段を下りると柱にもたれて十四郎が待っていた。

「どした？」

「出かけないか？」

十四郎は吸いさしの煙草を携帯灰皿にしまうとポケットに手を入れ歩き出した。

「なになに？パフェでもおごってくれんの？」

黙って先を行く十四郎におどけた口調で問いかけると銀時は肩を並べて歩き出した。

ここ数日寒い日が続いたが、今日は日差しがこころなしか柔らかく感じられた。

すっかりと春めいた陽気に気心の知れたふたりは何も言わずただ互いにのんびりと歩を進めた。

「こっちだ…。」

十四郎は大通りから1本入った薄暗く誰も通らないような細い小径へと折れた。

あれ以来すれ違う日々が続き、互いにつけた首筋の印もすっかりと消えていた。

忙しい中、仕事を抜けて来たのだろう…。

凛々しくしなやかな十四郎の隊服姿を眺めながら銀時はそのあとをついていった。

薄暗がりの小径を抜けると小さな神社に突き当たった。

古びた鳥居を抜けた途端、一陣の風が吹き銀時の視界一面を薄紅色の吹雪が舞った。

参道と呼ぶにはあまりにも短い神殿までの道のりに多数の桜が今を盛りに競うがごとく咲き誇っていた。

「きれいだろ？ここは俺の秘密の場所だ…。」

鳥居にもたれながら十四郎が言った。

「副長さんが堂々とそんなこと言っていいのかよ。それに俺に言ったら秘密じゃなくなるだろうが。」

「俺だってひとりになりたい時があんのさ。それにてめぇに隠し事はしたくねぇからな…。」

くわえようとした煙草を　戻し十四郎は銀時を見つめた。

「そんなこと言う暇があんなら逢いにこい…。」

「だから逢いに行ったんじゃねぇかよ…。」

十四郎は足元の土を蹴り上げお社に向かって歩きはじめた。

銀時は咲き誇る桜を見上げながらそのあとをゆっくりとついて行った。

ふたりが歩を進めるたびに小さな風が巻き起こり桜の花びらがふわりと身体にまとわりつくようにあとからあとからついてくる。

お社の前まではさほど時間はかからなかった。

「ここって、縁切りで有名なんだぜ。」

お社にたどり着くとふいに十四郎は言った。

「ふぅ～ん。」

銀時は桜の枝を見上げたままのんきな声で告げた。

「驚かねぇのかよ。」

「別に…。そん時はそん時だ…。」

「…冷てぇな。」

十四郎は振り向かずに呟いた。

「俺は神様なんて信じちゃいねぇ。…俺は俺のルールだけを信じて背筋伸ばして生きてんのさ。おい、忘れたのかあの日のこと…。」

十四郎は屋根の上で斬り結んだとき、肩を押さえ不敵に笑いながら銀時が告げたあの言葉に自分が「落ちた」ことをさっき起きた出来事のように鮮明に思い出した。

ふいに十四郎は背後から銀時にきつく抱きしめられた。

「おい…。何だよ急に。」

「お前を抱きしめるのに理由と許可がいるのかよ。」

銀時は十四郎の耳元で囁いた。

「ばか…。外だぞ。」

そう言いながらも十四郎は銀時の腕をそっと握った。

「誰もいねぇよ…。」

銀時は十四郎を振り向かせるとその漆黒の瞳を見つめそっとくちびるを重ねた。

「…ばか。」

十四郎は頬を染めうつむいた。

「…ばか。」

銀時は十四郎の髪をそっと撫でた。

そのとき、どこか遠くで春告げ鳥が一声啼いた。

（後書き）

最後までお付き合いいただいてありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6925l/

紅桜舞う日に

2010年10月28日05時57分発行